

天花寺北瀬古遺跡（第2次）発掘調査報告

— 三重県一志郡嬉野町 —

2001・3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢平野のほぼ中央部を東に流れる雲出川は、肥沃な土壌を下流域にもたらし、多くの文化を育んできました。雲出川同様、支流の中村川もその豊かな水流でもって時には多くの恵みをもたらし、またある時は乱流し、人々の生活に大きな影響を与えてきました。

この嬉野町という、文化的に注目すべき場所は、発掘調査によって出土した埋蔵文化財を中心として多くの貴重な文化財をこれまでに残し、受け継いできました。

今回報告の天花寺北瀬古遺跡は、県道松阪一志線の整備事業として、9年から実施されている県道整備工事のために、破壊される遺跡の発掘調査を行ってきたものです。来年度以降、この県道の新設部分の発掘調査、そして工事の期間中、現道の代替道路として新設される部分の発掘調査を行うものです。第1次調査でも、二面にわたって遺構と旧河道が発見され、縄文時代から近世までの多くの成果が得られました。

調査にあたっては、地元のみなさまを始め、嬉野町教育委員会、県土整備部・津地方県民局久居建設部などの関係機関から多大な協力とご理解をいただきましたことを心から御礼申し上げます。

平成13年3月

三重県埋蔵文化財センター
所 長 藤 澤 英 三

例 言

- 1 本書は、三重県一志郡嬉野町天花寺に所在する天花寺北瀬古（てんげじきたせこ）遺跡の第2次調査の発掘調査結果をまとめたものである。
- 2 本調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部より執行委任を受けて、平成10年度主要地方道松阪一志線道路整備事業に伴って実施し、調査費用は、三重県県土整備部が負担した。
- 3 調査の体制は以下のとおりである。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課
 技師 大川 操
 主事 松葉 和也、主事 木野本 和之
調査期間 平成10年10月27日～平成10年12月21日
- 4 調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課、津地方県民局久居建設部、嬉野町教育委員会、および地元の方々に協力いただきました。記して謝意を表します。
- 5 発掘調査後の遺物整理は、上記担当者のほか、資料普及グループ職員が補助した。
- 6 本書の執筆・編集は大川が行った。
- 7 本書で押図に示す方位は、すべて座標北を用いた。磁針方位は西偏 $6^{\circ}20'$ （平成11年）、真北方位は $0^{\circ}18'$ である。
- 8 本文中で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
SD：溝 SK：土坑 Pit：柱穴、小穴
- 9 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応させてある。
- 11 スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	(1)
1 調査の契機	(1)
2 調査の経過	(1)
(1) 調査経過概要	(1)
(2) 調査作業日誌(抄)	(1)
(3) 文化財保護法等にかかる諸通知	(3)
3 調査の方法	(3)
(1) 掘削について	(3)
(2) 地区設定について	(3)
(3) 遺構図面について	(3)
II 位置と歴史的環境	(5)
1 遺跡の位置	(5)
2 歴史的環境	(5)
III 基本層序と遺構	(5)
1 層序	(5)
2 遺構	(7)
(1) C地区の遺構	(7)
(2) D地区の遺構	(7)
(3) E地区の遺構	(12)
IV 遺 物	(12)
1 SK310出土遺物	(12)
2 SD313出土遺物	(13)
3 その他の出土遺物	(18)
V 結 語	(19)
(1) SK310について	(19)
(2) 旧河道と集落跡	(19)

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺遺跡 1:50,000	(2)
第2図 調査地周辺地形図及び周辺主要遺跡 1:5,000	(4)
第3図 調査区配置図 1:1,000	(6)
第4図 遺構平面図 1:500	(8)
第5図 第1次・第2次調査遺構配列 1:1,000	(9)
第6図 C地区土層断面図 1:80	(10)

第7図	D地区・E地区土層断面図 SD313・SK310土層断面図	1:80	(11)
第8図	出土遺物実測図(1)	1:4	(14)
第9図	出土遺物実測図(2)	1:4	(15)
第10図	出土遺物実測図(3)	1:4	(16)
第11図	出土遺物実測図(4)	1:4	(17)
第12図	出土遺物実測図(5)	1:4, 1:2	(18)

目 次

第1表	遺構一覧表	(20)
第2表	出土遺物観察表	(21~23)

図 版 目 次

PL1	上: C地区調査前風景(北から)	下: C地区調査区全景(北から)
PL2	上: C地区SK310土器出土状況(東から)	下: C地区SK310土器出土状況(西から)
PL3	上: C地区SD313土層断面(東から)	下: D地区調査区全景(南から)
PL4	上: D地区調査区北壁土層断面(南から)	下: E地区調査区北半全景(北から)
PL5	上: E地区調査区南半全景(北から)	下: E地区調査区南壁土層断面(北から)
PL6	出土遺物(1) C地区SK310出土土器	
PL7	出土遺物(2) C地区SK310出土土器	
PL8	出土遺物(3) C地区SK310出土土器	
PL9	出土遺物(4) C地区SK310出土土器	
PL10	出土遺物(5) C地区SK310・SD313, D地区包含層, E地区旧河道出土土器	

I 前 言

1 調査の契機

三重県の南北を繋ぐ幹線である国道23号線と平行して、松阪から久居・津方面へ向かう、県道松阪一志線の整備事業が年次的に行われている。

一志郡嬉野町天花寺地内の対象路線内には、今回報告の天花寺北瀬古遺跡をはじめ、小谷古墳群、天花寺城跡、小谷赤坂遺跡など多くの遺跡が存在した。天花寺北瀬古遺跡は、周知の遺跡として認識されており、昭和55年度に県営は場整備事業にかかる試掘調査が三重県教育委員会文化課により行われている¹⁾。

さらに平成7年度に、この県道松阪一志線整備事業地内の埋蔵文化財の実態確認のための試掘調査を三重県埋蔵文化財センターが行った。天花寺北瀬古遺跡では、20箇所の試掘坑を設定し、各試掘坑から

は、古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。このことから昭和55年度時点で把握されていた範囲よりもさらに西へ遺跡の拡がりがあることが予想された。

試掘の結果、三重県埋蔵文化財センター、文化芸術課、県土木部と埋蔵文化財保護のための協議を行い、事業地内における遺跡の発掘調査を行うことを決めた。調査は、県道インター嬉野線との合流地点となる部分の天花寺北瀬古遺跡から実施することとなり、平成9年度にその第1次調査が行われた²⁾。引き続き、平成10年度にはインター嬉野線との合流地点と松阪方面から既に道路拡幅されている部分の間を第2次調査として、調査することとなった。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

調査は平成10年10月27日にD地区の表土掘削から開始し、平成10年12月18日に現地作業を終了した。

調査地は、標高約11.9m前後の水田であり、対象地約1,350㎡の調査区が現道を挟んでいるため、3箇所に分断されている。

第1次調査で北から小調査区をA、大調査区をBとしたのに続いて、各調査区を第1次調査の県道を挟んだ東側にできる取付道路部分のC地区、第1次調査の南側のD地区、その県道を挟んだ東側のE地区とした。工事の進捗状況との関係から、最も小狭であるD地区から着手し、E地区、C地区の順に調査した。交通量の多い県道に近接した調査区であるため、安全を考慮して、調査区ごとに掘削→調査→埋戻しを繰り返した。

C地区では、部分的であるが中世の遺構が残る場所があるということが試掘調査で確認されていたため、上層遺構の記録が終了後、重機で下層の旧河道の堆積土掘削していたところ、旧水田の床土直下で砂層となった。表土から4m下げると大きく崩落してくるため、隣接する民有地の畑への配慮から、掘削の深さを約4mでとどめた。

D地区では中世の遺構がみられなかったため、駒返川の旧河道であろうと思われる堆積土上面で掘削をとめ、記録後に一部分のみ堆積土の掘削を行い、土層断面の記録をとった。

E地区では、排土置場の不足から北半と南半に分けて折り返して調査を行った。いずれも中世遺構は確認されず、旧河道堆積土上面で検出し、記録後部分的に掘削し、土層断面の記録を行った。

作業に参加していただいたのは、嬉野町天花寺、同町須賀領、同町田村、同町下之庄在住の方々である。お名前を記して感謝いたします。

金川庄一郎 高木 克 高見 明 中山一幸
堀田和男 小椋喜代子 阪井美代子 福島惠美子
西野きみ子

(2) 調査作業日誌(抄)

1998年
10月27日 D地区重機による表土掘削開始。
10月28日 D地区重機による表土・包含層掘削。
道具搬入及び地区設定。
10月29日 D地区人力遺構検出→全面流路。
土層断面図実測・写真撮影。
10月30日 D地区・E地区ふりこみ。



第1図 調査地周辺遺跡 1 : 50,000 (国土地理院「松阪」「松阪港」「大仰」「大河内」1 : 25,000より)

11月 2日 D地区遺構平面実測。
 11月 4日 D地区埋戻し開始→終了。
 E地区北半重機による表土掘削開始。
 11月 5日 E地区北半重機による包含層掘削。人力遺構検出→全面流路。
 11月 6日 E地区土層断面実測。写真撮影。
 11月 9日 E地区遺構平面実測。
 11月10日 C地区ふりこみ。
 11月11日 E地区北半埋戻し開始。E地区南半地区設定。
 11月16日 E地区南半重機による表土・包含層掘削。E地区人力遺構検出→全面流路。E地区南半写真撮影。
 11月17日 E地区南半写真撮影。ふりこみ。遺構平面実測。
 11月18日 E地区埋戻し開始→終了。
 11月19日 C地区重機による表土・包含層掘削。
 11月20日 C地区人力遺構検出・遺構掘削。
 11月24日 C地区重機による表土・包含層掘削・遺構検出・遺構掘削。
 12月 3日 C地区SK310掘削開始。
 12月 8日 C地区全景写真撮影。SK310の掘削続行。

12月 9日 C地区遺構平面実測・土層断面実測。
 12月10日 C地区下層（流路）調査開始。重機による堆積砂層掘削開始（約4m毎に）→土層断面実測→埋戻し。
 SK310の掘削続行。
 12月16日 SK310土器出土状況写真撮影→とりあげ。
 SK310の拡張→バレス壺・高杯出土。
 12月17日 SK310土層断面実測。
 12月18日 発掘道具片付け。
 12月21日 C・D・E地区の久居建設部へ引渡し。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
 平成7年7月20日付け、道県第825号（県知事通知）
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
 平成10年10月27日付け、教生第1155号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
 平成11年2月1日付け、教生第8-44号（県教育長通知）

3 調査の方法

(1) 掘削について

当遺跡では、試掘調査の結果から、部分的に中世以降の上層と、奈良時代以前の下層の2面が確認される箇所が部分的にあることがわかっていった。厚さ約30cmの表土については、重機による掘削を行いながら、上層遺構の有無を確認しつつ、包含層除去を行っていったところ、D・E地区については調査区内で上層遺構はみられず、C地区のみ部分的に中世の遺構が確認された。下層の旧河道の掘り下げ作業は、現地表面から約3mに及ぶもので、重機によって掘削を行った。

(2) 地区設定について

調査地区の設定は、D・E地区の間の現道ラインを基準軸として4m四方の升目で区切り、南北にアルファベットでA～W、東西に数字を1～9とつけ、橋目北西隅の交点を地区名とした。なお、この方眼は国土座標とは無関係に任意で設定したものである。

(3) 遺構図面について

調査区の平面図及び土層断面図は、上・下層とも縮尺1/20で手書きした。

また、各小地区ごとに国土座標に基づく基準点を設置し、これに従って各調査区を座標中に表現した。



第2図 調査地周辺地形図及び周辺主要遺跡 1 : 5,000

II 位置と歴史的環境

1 遺跡の位置

天花寺北瀬古遺跡は、三重県一志郡塘野町天花寺北瀬古に所在する。

三重県のほぼ中央部を東西に流れ、伊勢湾に注ぐ雲出川が北側を、その支流である中村川のさらに支流である駒返川が南端を流れる一志丘陵の東側の一端に天花寺丘陵がある。標高36～45m前後のなだら

かな丘陵で、頂部近くの視界の開けた所からは、北は鈴鹿山脈、東に豊かな伊勢平野・伊勢湾を見渡することができる。北側の裾地にはJR名松線が横切っている。この丘陵東麓部、現在の天花寺集落までの間の水田・畑地に天花寺北瀬古遺跡が存在する。

2 歴史的環境

雲出川流域から中村川下流域にかけての歴史的環境については、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』および『天花寺北瀬古遺跡（第1次）・葉師寺北浦遺跡発掘調査報告』に詳しい記述があり、詳細はそれらを参照されたい。ここでは、その後の発掘調査により新たに明らかとなった歴史的事実について若干触れて、調査地周辺の観察を行いたい。

天花寺北瀬古遺跡の第1次調査以後、天花寺丘陵周辺では、同年度に天花寺丘陵内遺跡群内小谷赤坂遺跡の第4次調査、今回の天花寺北瀬古遺跡第2次調査と同時に天花寺丘陵内遺跡群内小谷赤坂遺跡の第5次調査・清水谷遺跡第3次調査が行われており、丘陵上とその周辺の遺跡の様相がかなり明らかとなってきている。

丘陵上では小谷赤坂遺跡の第4次調査において、弥生時代後期の集落がさらに広く展開していたことや、中世には多くの墓が設置されていたことが判明

した。また近世には礎石経埋納施設が確認され、当該時期の信仰関連遺構の実態解明に繋がる成果が上がっている。また小谷赤坂遺跡（第5次調査）から清水谷遺跡にかけて、弥生時代後期の環濠が二重に巡り、集落の西端が明らかとなった。環濠内には多くの堅穴住居が検出され、その実態や時期ごとの推移の様子について詳細な資料が得られた。

丘陵東麓にあたる天花寺北瀬古遺跡の第1次調査では古墳時代、平安時代末期から近世にわたる時期の遺構とその下層の旧河道から縄文時代晩期から近世に至る幅広い時代の遺物が確認された。

これら周辺の調査から、各時代にわたって重要な地理的・歴史的位置を占める当該地の、弥生時代後期から古墳時代、奈良時代へかけて丘陵上の遺跡の様相の変化を解明する一つの鍵は、今回調査地周辺の微高地である丘陵東麓の遺跡の実態調査が握っており、その解明に期待が寄せられるものである。

III 基本層序と遺構

1 層序

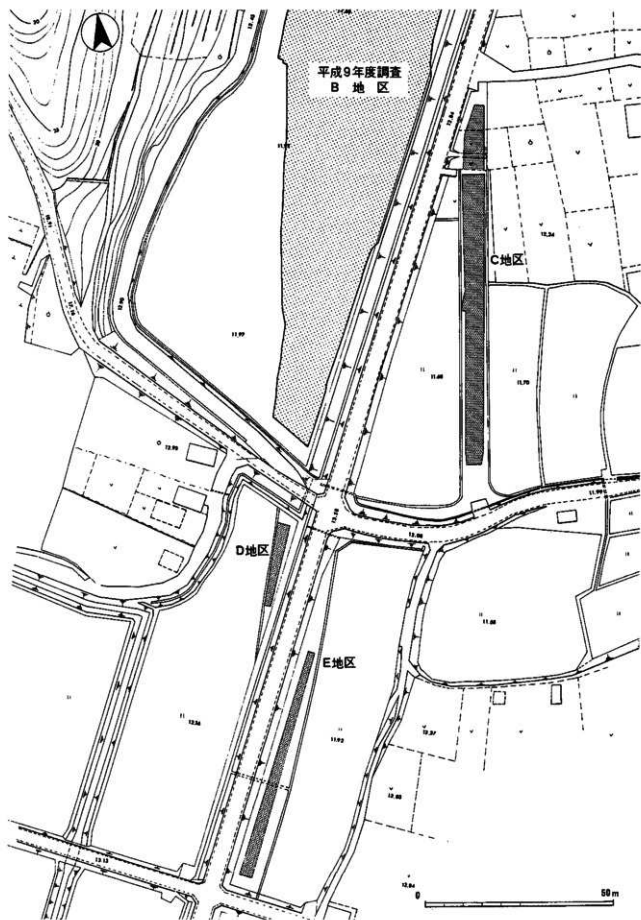
C地区 調査区周辺の標高は、12.3～11.6mで、上層の基盤は黄褐色粘砂土で標高約11.4m、下層は灰白砂礫土の旧河道底土で標高約9.5～10.0mで観察される。

- 第1層：表土 褐色土
- 第2層：包含層Ⅰ 灰黄褐色土
- 第3層：包含層Ⅱ 極暗赤褐色土
- 第4層：地山 黄褐色粘砂土

D地区 調査区周辺の標高は約12.2mである。上層基盤は黄褐色粘砂土で標高約11.2m、下層の旧河道底土は標高約10.5mでみられる。

- 第1層：表土 暗赤灰粘質土
- 第2層：包含層Ⅰ 暗赤褐色土
- 第3層：地山 にぶい黄褐色砂質土

E地区 調査区周辺の標高は約11.9mである。基盤は黄褐色砂質土で、標高10.8～11.2m、旧河道底



第3図 調査区配置図 1 : 1,000

土は標高9.9～10.5mで観察される。

第1層：表土 灰粘質土

2 遺構

弥生・古墳時代から鎌倉・室町時代までの遺構を確認した。しかし、上層遺構は、耕作時の掘削が遺構面に達するほど浅い箇所もあり、時期決定し難いものがあった。

以下、C～Eの各地区毎に遺構の概説をする。

(1) C地区の遺構

当該事業のなかで、工事中の間の取付道路部分の調査で、幅約8mのうち東西両側の民有地への配慮から約1.5mの控えをとった、幅約5m×長さ約94mの調査区を設定した。

SK300 調査区北端で検出した不整形土坑で、1.0m×1.5mである。

土師器の皿片が出土した。

SK301 調査区北端東壁で西半分を検出した、浅い土坑である。

土師器細片がわずかに出上した。

SK302 調査区中央部で検出した長楕円形の土坑で、残存の深さ約5cmである。

土師器の皿片が出土した。

SK303 SK302の南側で検出した、長楕円形の土坑で、残存の深さ約12cmである。

出土遺物は、土師器の杯片や皿片・甕口縁が出上した。

SK304 調査区中央部西壁際で検出した土坑である。暗褐色の埋土中から土師器皿片・銅片などが出上した。

SD305 SK304・SK306と重複する、東西方向に延びる溝状の遺構である。幅約30cm、深さ約7cm、西下がりの勾配をとり、埋土は灰褐色土である。

土師器細片が出土した。

SK306 SD305の東端にある楕円形の土坑で、SD305より後出のものである。

暗褐色の埋土から土師器片が出土した。

SK307 調査区西端にわずかにかかる南北に長い楕円形の土坑である。遺構検出面から約22cmの深さまで掘鉢状に深くなるもので、土師器皿片・銅片が出土した。

第2層：包含層Ⅰ 灰黄砂質土

第3層：地山 灰褐色細砂

SK308 SK307の東隣にある東西に長い楕円形の土坑である。深さは10cm、灰褐色土の埋土から土師器皿片が出土した。

SK309 SK307の南側にあり、調査区西端にわずかにかかる土坑である。

暗灰褐色の埋土で、土師器皿片が出土した。

SK310 試掘坑で東端をかすめ、多くの遺物を出した土坑で、南北約8.5mの円形の土坑になるものと思われる。試掘坑にかかった東端の部分から西へ向けてゆるやかに深くなっており、弥生時代後期～古墳時代にかけての古式土師器の高杯・S字状口縁台付甕（以下、S字甕）が多く出上り、調査区西壁方向へ続いていたため、工事対象範囲まで調査区を一部拡張したところ、さらに多くの古式土師器高杯・広口壺・パレス式壺・直口壺が良好な残存状況で出土した。主として土坑北寄りて広口壺・S字甕が、また土坑のやや南寄り～拡張部にかけての部分で完形の高杯やパレス式壺口縁が出上したもので、拡張部分西壁の土層から、土坑は工事対象範囲からわずかに西の民有地畑へと広がっているものと考えられる。

SD311 SK309に重複する東西方向の溝である。

西勾配の溝で、土師器銅片が出土した。

SD312 試掘坑にかかって検出された溝の延長で拡張部分西壁の土層からやや曲線的に延びる溝で、西勾配をとり、土師器皿片が出土した。

SD313 調査区南側で検出した東西方向の溝で、幅約1.5m、深さ約70cm、灰褐色土の埋土から土師器銅・羽釜が出土した。

SD314 SD313のさらに南側に同じく東西方向に延びる溝で、試掘坑でその端部が確認されていたものである。幅約0.6m、深さ20～30cm、東勾配の溝で、暗灰褐色の埋土から土師器皿片が出土した。

(2) D地区の遺構

調査を開始して第一に着手した調査区で、県道の西側で、昨年度調査のB地区の南側にあたる地点をD地区とした。計画路線が現道よりわずかに西に振



D地区

42.840

-152.000



C地区

42.700

-151.880



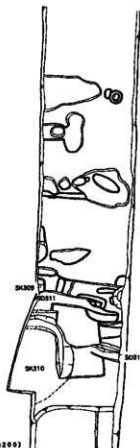
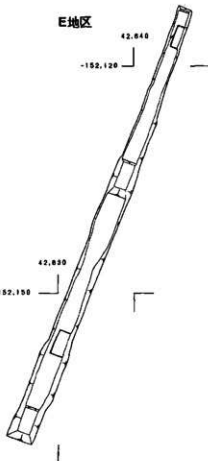
E地区

42.640

-152.120

42.620

-152.150



C地区透视图(1:200)

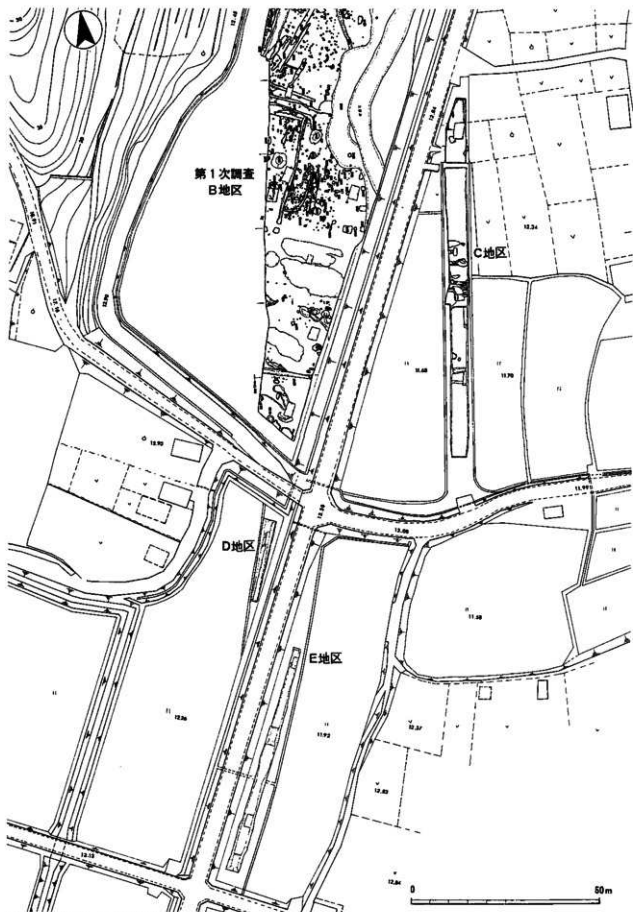
-152.020

-152.040

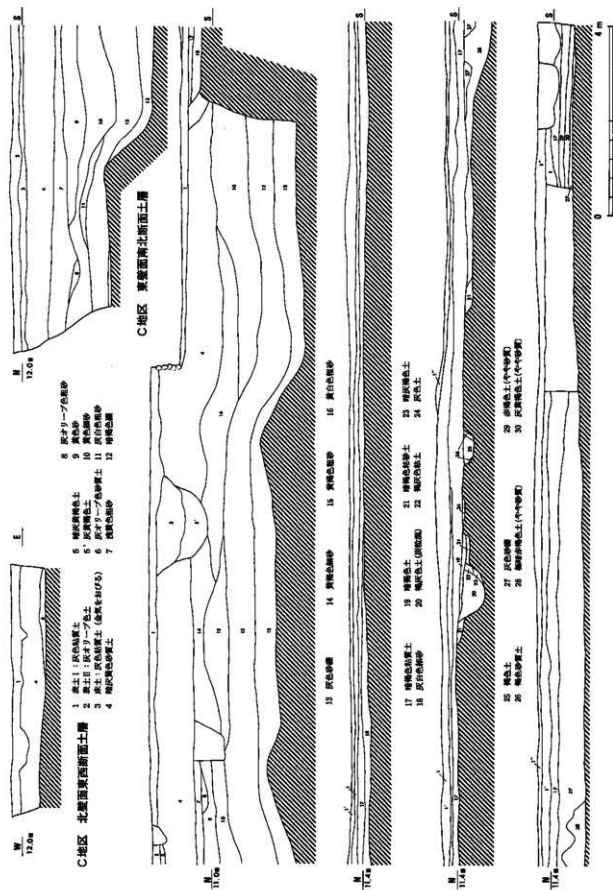
0 20 m

0 5 m

第4图 透视图 1:500



第5图 第1次、第2次調査遺構配列 1 : 1,000



第6図 C地区土層断面図 1:80

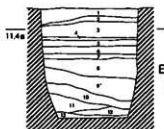


D地区
北壁東西断面土層

- | | |
|-----------------------|-------------|
| 1 褐色粘質土 | 5 褐色砂質土 |
| 2 明褐色粘質土と褐色色粘質土のブロック層 | 6 4と5のブロック層 |
| 3 褐色粘質土 | 7 黄灰色細砂 |
| 4 褐色砂質土 | 8 黄灰色細砂 |
| | 9 灰褐色砂質土 |

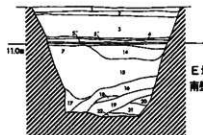


D地区
南壁東西断面土層



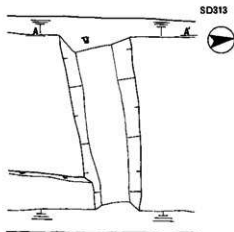
E地区
北壁東西断面土層

- | | |
|----------------------|------------|
| 1 灰色粘質土 | 7 灰褐色細砂 |
| 2 明黄褐色粘質土 | 8 灰褐色細砂 |
| 3 灰褐色粘質土 | 9 暗オリーブ色細砂 |
| 4 黄褐色粘質土 | 10 明黄褐色細砂 |
| 5 暗灰色粘質土と黄褐色色砂のブロック層 | 11 にぶい黄色細砂 |
| 6 灰褐色砂 | |

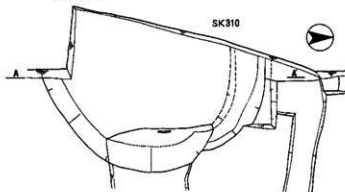


E地区
南壁東西断面土層

- | | |
|--------------|-------------|
| 12 灰黄色粗砂 | 18 オリーブ色砂 |
| 13 オリーブ色砂 | 19 灰白色粘土 |
| 14 にぶい黄色粘質土 | 20 オリーブ黄色細砂 |
| 15 黄褐色砂 | 21 黄褐色砂礫 |
| 16 黄褐色砂(炭粒混) | |
| 17 褐色色砂 | |

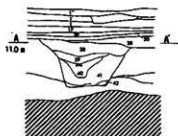


SD313

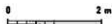
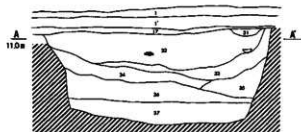


SK310

- | | | |
|------------|-----------------|-----------------|
| 1' 褐色土 | 29 赤褐色土(中々砂質) | 40 褐色粘土(4cm大礫混) |
| 1'' 灰色粘土 | 30 灰黄褐色土(中々砂質) | 41 灰黄褐色粘土 |
| 1''' 灰色粘質土 | 31 灰黄褐色砂質土 | 42 黄灰色粘土 |
| 17' 灰色土 | 32 灰黄褐色砂質土(炭粒混) | |



- | | | | |
|----------|-----------|----------|---------|
| 1 灰色粘質土 | 31 暗褐色粘土 | 34 褐色色砂 | 37 灰白色砂 |
| 1' 灰色粘土 | 32 褐色粘土 | 35 褐色色砂礫 | |
| 17 暗褐色粘土 | 33 黄褐色粘質土 | 36 灰白色砂 | |



第7図 D地区・E地区土層断面図 SD313・SK310 土層断面図 1 : 80

れるため、調査対象面積としてはわずかであるが、幅2.0～3.4m、南北22mの可能な限りの調査区を設定した。現地表面から約30cmの表土除去後、上層遺構の検出を行ったところ、東側の調査区壁際で、幅約50cmにわたって、ほ場整備前に使用されていたという用水路跡が検出された。このほかの遺構はみられず、旧河道上面の砂層まで掘削、土層断面の記録を行った。調査区北端部分で部分的に旧河道底面の検出を試み、標高約10.5mで礫層を検出した。出土遺物としては包含層中から古墳時代～奈良時代にかけての土師器杯・銅片、須恵器杯蓋などが出土した。また旧河道底面を確認した際に遺物は出土しなかった。

IV 遺物

出土遺物は、主としてC地区SK310のもので、C地区の他の遺構、およびD・E地区からの出土遺物は極めて少なかった。出土遺物は整理箱で約25箱である。

1 SK310出土遺物

高杯（1～16） SK310からは多くの完形に近い高杯が出土している。口径が24.8～28.6cm、器高が19.7～24.9cmとわずかに大きさに開きがあるもの、ほぼ同じ法量の高杯である。

杯部は径約10～12cmの底面をもち、そこから緩やかに内弯しながら外方にむけて立ち上がる。口縁端部はヨコナデし、幅5～7mmの面をもつ。外面は脚部付け根から立ち上がりとの屈曲部までに放射状にミガキを1段、屈曲部から口縁までは縦方向のミガキを1段施すもの（1～5・7）と、2段施すもの（6・9・10）とがあり、特に丁寧に作るもの（5・7）は横方向のミガキの後に縦方向のミガキを密に施してある。内面もミガキが施されるが、見込み部は放射状に1段、立ち上がり部分は1段で仕上げるもの（2～5・7・10）と、2段で構成するもの（6・9）とが見られる。

脚部は径が約11～13cm、高さが約10～12cmで、直線的に開く円錐形のもの（2～4・8）と透かし孔

(3) E地区の遺構

先述のC地区の南側で、泉道の東側の幅約2.0～3.4m、南北62mの調査区を設定した。掘削場所は都合上、南北を二分割して折り返して調査を行った。

現地表面から約1.3mで砂層となり、ここでは上層遺構はみられず、試掘坑が確認できたのみである。交通量の多い泉道に近接した場所での掘削であったため、下層の旧河道の掘削を部分的に限定して、掘り下げ、土層断面の記録を行った。出土遺物も砂層上面検出時にわずかに須恵器短頸壺・手持ち盤などの装飾杯部分を出土したのみで、旧河道埋土中からは遺物の出土はなかった。2箇所の掘削地点での旧河道底面と思われる礫層の標高は約9.9～10.5mで東勾配の土層が観察できた。

旧河道埋土の掘削時に出土した遺物は、C地区での小破片4片を除いて皆無に近い状況であった。以下、C地区SK310出土の遺物を中心に概述する。

の下でやや膨らみながら端部を伏せ気味に終わらせるもの（1・5～7・10）に分かれる。透かし孔はいずれも径1.4～1.6cm、3方向に開けてある。外面はタテハケを施した後、縦方向のミガキ、さらに透かし孔までは脚部横線文を施す。内面は斜め方向のハケメで端部をナデ調整する。先端は較り痕跡がみられ、1・5・8・10には先端工具痕跡が見られる。

11の高杯は、杯部は口径が21.6cm、立ち上がりは大きく外反して開く。中実脚柱部に開いた脚部が付き、径1.0cmの透かし孔が3方向に開けられている。杯部の調整は立ち上がりとの屈曲部までに放射状のミガキが1段、口縁端部までに斜め方向のミガキ1段で構成する。口縁端部をヨコナデし、内面も見込み部で1段、立ち上がりに斜め方向のミガキ1段で構成する。また脚柱部は縦方向のハケメで、脚部でハケメが放射状に施される。東海地方の高杯とは系統の異なる畿内系の高杯である。東海系（1～16）の破片は多く出土しているが、畿内系のもの

は11以外には1片も出土していない。

壺(17~25) 広口壺・瓢壺・パレススタイルの壺が出土するが、高杯に比べて復元可能な個体が少なく、大半が体部の破片である。

17はいわゆるパレススタイルの壺の口縁部である。口縁部は完形で、頸部の突帯以上が残存し、胎土は白色で焼成が軟質である。頸部に突帯を2条貼り付け、上下に拡張した口縁端部は外側に広い面を成し、5条の擬凹線文を施した後、4本単位の棒状浮文を口縁円周の4箇所ほぼ均等に配する。口縁内面は綾杉状刺突文が巡らされ、綾線際に竹管による円形刺突文が全周に施される。またベンガラと思われる赤彩顔料が薄く残存しており、頸部外面の突帯部分、口縁端部の棒状浮文を除く拡張面上、口縁内面の綾線から体部への変換点までの間に観察でき、胎土の白色と対比するように部分ごとに縞状に塗り分けたものとみられる。この17の個体とは別個体のパレススタイルの壺頸部破片が、SK310の一部を試掘で検出した際に出土している。

18・23は、いずれも黄褐色の胎土の壺で、18は体部最大径の部分で接点こそないもののほぼ完形で、23は口縁から体部上半が残存するものである。18では頸部に突帯を巡らせ、突帯上に斜めに刻目を施し、口縁外面にシボリ痕がみられる。東海産のものではないかと思われる。

22は体部のみが残存する。ハケメ後ナデ調整する体部外面上方にヘラ描による流線的な模様を線刻が施されるが、体部欠損部に線刻が及ぶため、線刻全体の模様は不明である。

24は瓢壺の口頸部である。体部を欠損するが頸部以上は完形である。内外面とも非常に密にミガキが施されており、口縁端部内面をヨコナデし、面をつくっている。

26~34は、いずれも壺の体部破片である。比較的焼成も良好で、施文を明瞭に観察することができる。帯描横線文を基本に綾杉状刺突文、櫛状・貝殻・板状工具木口等による刺突などが施される。

壺(35~67) く字状口縁とS字状口縁の壺が出土するが、S字状口縁のものが圧倒多数を占める。

35・36はく字状口縁壺の体部上半から口縁にかけての破片である。体部外面をタテハケ、口縁部をヨコナデ、内面はナデあるいはヨコハケで調整する。

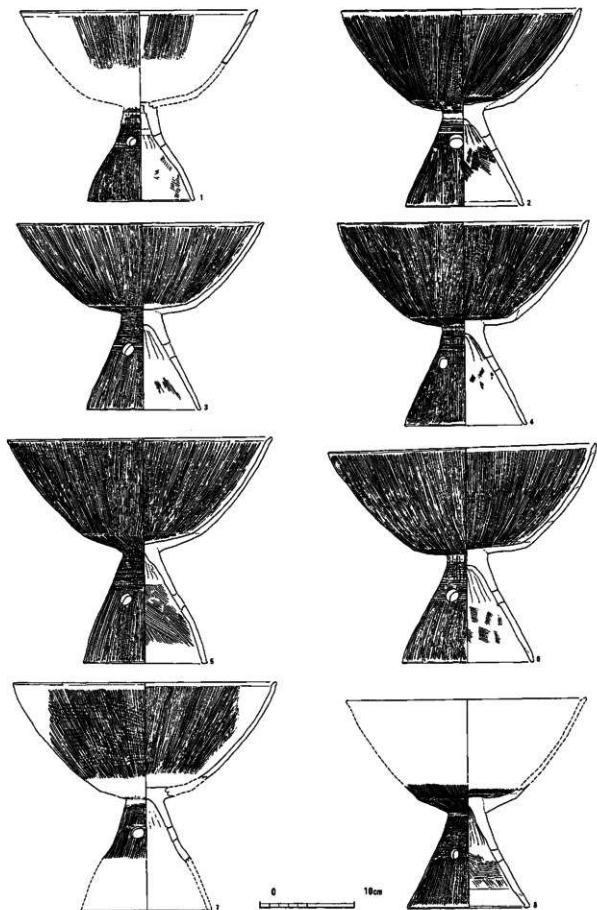
35については体部外面のタテハケ上から粗い波状文を、また口縁内面にも帯描横線文の後波状文を施すもので、関東系のものである可能性がある。

37~67のS字状口縁台付壺が多くは土坑底部から出土し、66のみ高杯9の内面に入り込んだ状態で出土したものである。いずれも口縁外面に刺突文あるいは押し刺突文が施され、体部外面はタテハケ、口縁直下のヨコハケを巡らす。口縁端部を特に強くナデ、明確な面をもたせるものが多いが、その意識がやや弱いもの(37・41・45)もみられる。赤塚次郎氏による分類のA類に相当する⁵⁸。56のみ口縁外面に刺突文がみられず、また口縁の屈曲も端部のナデによる面もなく、上方に真直ぐ立ち上がる。他のA類の個体の前身とされる0類に相当する可能性がある⁵⁹。59・60、62・63の脚台内面には炭片を多く含んだ砂粒の付着がみられる。

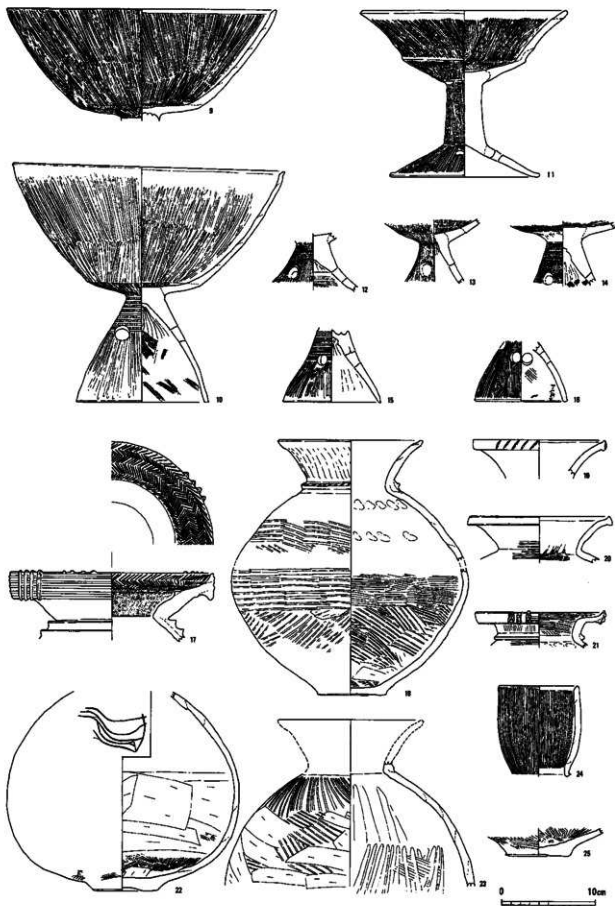
手焙り形土器(68) 11線・覆部・鉢部の各破片を断片的につないで復元的に図示したものである。胎土はS字状口縁台付壺によく似ていて、精緻な胎土に1mm前後の砂粒が比較的多く入るもので、S字壺に比べてやや白い。覆部とその端部に付く面の部分が最もよく残存している。高橋一夫氏によるB2類に相当するものと考えられる⁶⁰。面部には貼り付けの突帯を2条、覆部には口縁との接合部上方に綾杉状の刺突の帯が2条、頂部はケズリで調整している。面部は器壁よりかなり幅広く、面の中央部やや下寄りに覆部が丁字形に接合する。また覆部は口縁端部をわずかに残して鉢部と接合する。口縁部直下に単斜の刺突を巡らせ、体部は破片が1片しか残存していないが、底部から内弯気味に立ち上がるものと推定される。体部と底部の境目には不整形の浮文を張り付けた突帯を一周巡らせている。底部はナメハケで調整し、一部に灰色の斑がみられる。底部の形状は欠損するため不明であるが、底部の残存する内面端部の形状から、その他の特徴も類似する白灰遺跡出土例のように上げ底状になるものと思われる。

2 SD313出土遺物

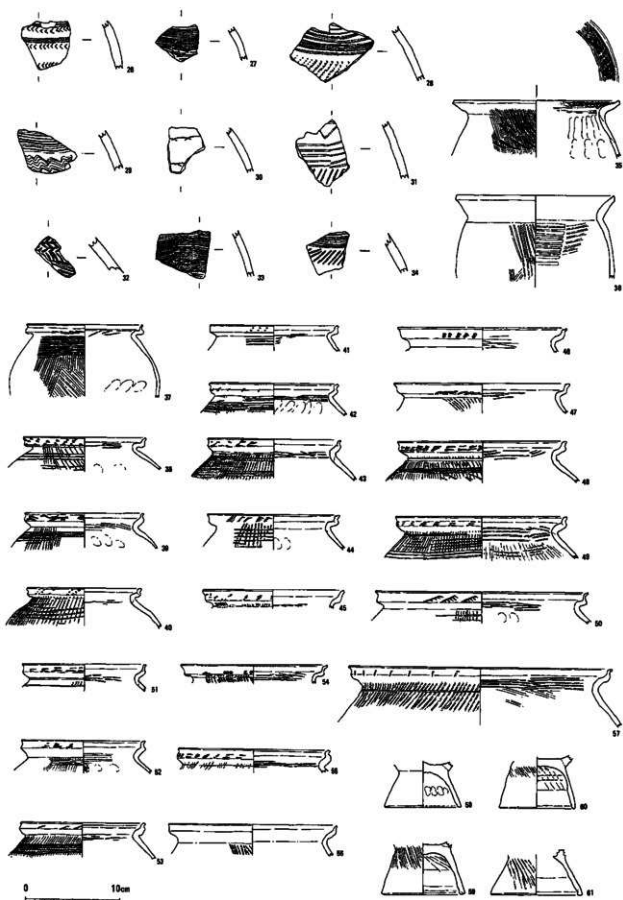
鍋(71)・羽釜(70・72) 伊藤裕裕氏の編年によると14世紀中葉~15世紀前半頃に相当する鍋・羽釜と思われる。第1次調査のB地区SD126が15世紀



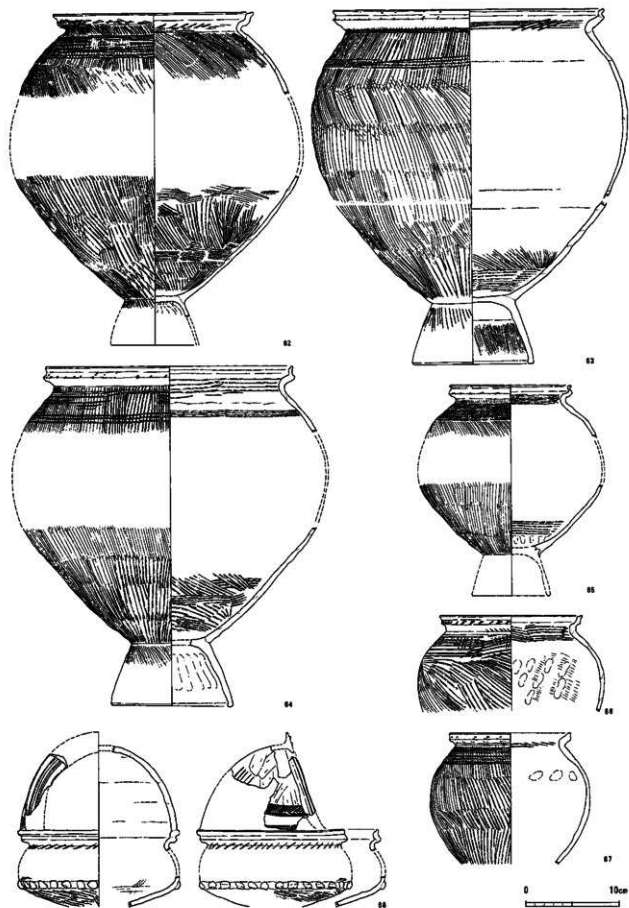
第8圖 出土遺物実測圖(1) 1:4



第9圖 出土遺物実測圖(2) 1:4



第10图 出土遺物実測图(3) 1:4



第11图 出土遗物实测图(4) 1:4

後半の土器を出しているが、現道を挟んで対峙する位置関係にあることから、SD126の延長にあたる

可能性も考えられる。

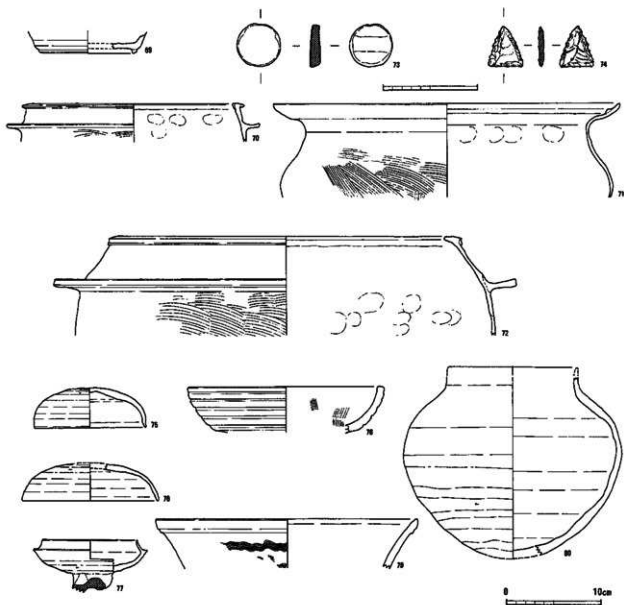
3 その他の出土遺物

C地区包含層 69の須恵器杯破片、73の陶器加工円盤、74の石鏃が出土している。

D地区包含層・旧河道 75の須恵器杯蓋、79の須恵器壺口縁が包含層から、また78の土師器碗が旧河道から出土している。75の杯蓋は田辺編年のTK217型式に並行するものと思われる。79の壺は口縁外面に粗い波状文がみられる。

E地区包含層・旧河道 76・77の須恵器が包含層から、80が旧河道上面から出土した。76の杯蓋は田辺編年のTK209型式頃に並行するものと思われる。

この他に、平成11年に現道部分を断ち割る工事を行った際に、立ち会いを行ったところ、現道の交差点直下から五輪塔の一部が2基出土した。いずれも



第12図 出土遺物実測図(5) 1:4, 73・74のみ1:2

表面がかなり磨滅していて、出土地点からみて、第1次調査で報告のあった三郷井の護岸石材として転

用されたものではないかと思われる。

V 結 語

今回の2次調査で明らかとなった、弥生時代末期から古墳時代初頭の頃の旧河道と集落の所在の実態について述べることで、調査のまとめとしたい。

(1) SK310について

SK310からは非常に多くの土器が集中して出土した。中には土坑内で破片が散っているものもみられたが、大半がほぼ完形のものか接合部で割れているのみか、割れてはいても元位置を留めているものであった。周辺の遺構密度や、旧河道が乱流し限定される安定地盤のことを考えると、単なる廃棄目的の土坑とは考えがたく、水辺に面した安定地盤の突端部において祭祀的行為が行われた土坑であることが推測できる。遺物、高杯・S字甕が圧倒多数であり、高杯・壺にみられる産地別特徴とその出土比率から、畿内の文化流入路と東海文化との合流する地点における集落の一文化様相が窺える。またS字甕からの集落研究において、A類を主体とする出土構成をも

つ土坑を有する集落が、同類のS字甕が出土する雲出川下流の雲出島貫遺跡と松阪市阿形遺跡¹³との間に存在することで、相互の関連性や集落の実態解明に繋がる貴重な発見であったといえる。

(2) 旧河道と集落跡

1次調査の旧河道で、弥生時代末から古墳時代にかけての遺物が多く出土し、その磨滅の度合いの少なからさほど遠くないところに当該時期の集落の存在が想定されるものと考えられた。今回調査のC地区SK310およびその周辺のみならず遺構がみられることから、SK310以北の14mほどは東側に広がる現在の集落が立地する微高地の縁辺にあたるものと考えられる。旧河道に接近していながらも土坑という形で遺構を検出し得たことで、このSK310以東に広がるであろう微高地に集落跡が存在する可能性をより高いものにしたといえる。

[注]

- (1) 山田 猛「天花寺発掘調査報告」『昭和55年度宮城県発掘発見事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1981 三重県教育委員会
- (2) 木野本和之・川地由紀子編「天花寺北遺跡第1次・東郷寺北遺跡発掘調査報告」1999 三重県埋蔵文化財センター
- (3) 伊藤裕隆「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告」1996 三重県埋蔵文化財センター
- (4) ②に同じ
- (5) 「天花寺小谷赤坂遺跡第4次調査」『三重県埋蔵文化財年報』1998 三重県埋蔵文化財センター
- (6) 木野本和之・川地由紀子編「天花寺丘陵内遺跡群IV」2006 三重県埋蔵文化財センター
- (7) 川崎志乃氏のご教示による。
- (8) 牧島博己「藤原入道土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告第25巻』1990 国立歴史民俗博物館
- (9) 伊藤裕隆氏のご教示による。
- (10) 赤塚次郎「藤原式土器」『埋蔵遺跡』1990 財団法人埋蔵文化財センター
- (11) 原田神氏のご教示による。
- (12) 高橋一夫「手埴形土器の研究②-伊勢湾・近江・北陸地方-」『研究紀要第13号』1997 海城大学埋蔵文化財調査事業団
手埴形土器の各部名称については上記論文に準ずる。
- (13) 原田康博子氏のご教示により白浜遺跡出土の手埴形土器を参考とした。『白浜遺跡発掘調査報告』1990 本誌遺跡群調査委員会
- (14) 伊藤裕隆「伊勢の中世東海用土器から東海を見る」『輪と壺そのデザイン』1996 第4 巨東海考古学フォーラム
- (15) 田辺昭三『須賀野大成』1981 角川書店
- (16) 榎田也他「ヒタキ集寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか」1992 三重県埋蔵文化財センター

仮遺構名	遺構番号	大地区	小地区	時期	特徴・形状など
溝 1	SD305	C地区	L 8	時期不明	
溝 2		C地区	M 8	時期不明	
溝 3	SD312	C地区	M 8	時期不明	
溝 4		C地区	M 8		SK310に改称
溝 5	SD311	C地区	M 8	鎌倉～室町	
溝 6	SD311	C地区	M 8	鎌倉～室町	
溝 7	SD313	C地区	S 8	鎌倉～室町	
溝 8	SD314	C地区	S 8	鎌倉～室町	
土坑 1	SK300	C地区	C 8	鎌倉～室町	
土坑 2	SK301	C地区	D 9	鎌倉～室町	
土坑 3	SK302	C地区	J 8	鎌倉～室町	
土坑 4	pit 4	C地区	K 8	鎌倉～室町	
土坑 5	SK304	C地区	K 8	鎌倉～室町	
土坑 6	SK307	C地区	L 8	鎌倉～室町	
土坑 7	SK308	C地区	L 8	鎌倉～室町	
土坑 8	SK303	C地区	K 8	鎌倉～室町	
土坑 9	SK306	C地区	K 8	鎌倉～室町	
土坑 10	SK309	C地区	M 8	鎌倉～室町	
土坑 11		C地区	M 8		攪乱
土坑 12		C地区	N 8		攪乱
土坑 13		C地区	R 8		攪乱
土坑 14		C地区	R 8		攪乱
土坑 15	SK310	C地区	M 8～N 8	弥生後～古墳	南北にやや長い楕円形の土坑
試掘坑取付 No. 2		C地区	S 8		
試掘坑取付 No. 3		C地区	M 8～N 8		SK310の一部を試掘時に検出
試掘坑取付 No. 4		C地区	C 8		
流路	旧河道	C地区	A 8～E 8, N 8～U 8		
包含層	包含層	C地区	A 8～U 8		
流路	旧河道	D地区	B 2～H 2	古墳～奈良	
試掘坑 No. 16	旧河道	D地区	C 2		
包含層	包含層	D地区	K 6～R 6		
流路 2	旧河道	E地区	K 6～Z 6	古墳	
試掘坑 No. 3	旧河道	E地区	L 6		
試掘坑 No. 4	旧河道	E地区	Q 6		
包含層	包含層	E地区	K 6～Z 6		

第1表 遺構一覧表

No.	登録No.	種別	出土位置	計測値	調査・技法の特徴	粘土構成	色調	残存度	備考	
1	002-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 24.8 底径 20.0 高さ 11.0	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細な金雲母 片多し含 精微	良好	内：黄緑SYR7/8-赤黄10R6/8 外：黄SYR6/8-赤黄10R5/8	杯底 20% 杯部底完	脚部に径1.3cmの 透かし孔3方向
2	001-03	土師器 高杯	NS SK310	口径 25.0 底径 20.6 高さ 12.6	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	1mm大砂粒・ 金雲母含 精 微	良好	内：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8	杯底 50% 杯部底完	脚部に径1.6cmの 透かし孔3方向
3	022-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 25.9 底径 21.9 高さ 11.9	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.5mm大砂粒 ワケ片含	良好	内：赤黄10R7/8-黄SYR7/8 外：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 (赤黄10R7/8-黄SYR7/8)	杯底 30% 杯部底完	径1.5cm透かし孔3 方向 杯部 1217-d 脚部 1217-b
4	002-02	土師器 高杯	NS SK310	口径 26.6 底径 21.4 高さ 12.6	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	3mm大砂粒多量 微細な金雲母多 く含 精微	良好	内：黄SYR7/8-黄緑SYR4/4 外：黄SYR7/8-黄緑SYR4/4	杯底完	脚部に径1.5cmの 透かし孔3方向
5	021-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 27.8 底径 23.8 高さ 13.0	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.5mm大砂粒 ワケ片含	良好	内：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8	口縁 70% 杯部底完	径1.5cm透かし孔3 方向 杯部 1217-a
6	016-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 28.0 底径 23.1 高さ 12.9	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	2.5mm大砂粒 含 やや粗	良好	内：黄SYR7/8-黄緑SYR7/8 外：黄SYR6/8-赤黄10R5/8 (口縁・脚部外部に黒くSYR6/8)	ほぼ完	径1.9cm透かし孔 3方向 杯部 1217-c
7	004-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 27.8 底径 23.5 高さ 12.9	1. びら→ヨコナデ→横方向に 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	コゲム片・黒 色ワケ片含 精微	やや甘い	内：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 (赤黄10R5/8-黄SYR7/8)	口縁 1/2 杯部 1/2	径1.4cm透かし孔 3方向
8	007-02	土師器 高杯	NS SK310	脚径 12.6 残高 12.9	1. びら→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細な雲母片 多し含 精微	やや甘い	内：赤黄10R7/8-黄SYR7/8 外：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 (黄SYR7/8-赤黄10R5/8)	杯部 50% 全体の40%	脚部に径1.5cmの 透かし孔3方向
9	017-01	土師器 高杯	NS SK310	口径28.2 →29.2 残高12.0	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	1.5-3.0mm大 砂粒 微細な ワケ片含	良好	内：黄SYR7/8-黄緑SYR7/8 外：黄SYR6/8-赤黄10R5/8	杯部のみ 完	杯部 1217-a
10	023-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 28.6 底径 24.9 高さ 13.8	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.5mm大砂粒 ワケ片含	並	内：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 外：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8	杯底 30% 杯部底完	径1.5cm透かし孔3 方向 杯部 1217-a
11	001-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 21.6 底径 17.5 高さ 15.4	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	金雲母・黒雲 母多し含 精微	やや甘い	内：黄SYR6/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR6/8-赤黄10R5/8	杯底 70% 杯部 60%	脚部に径1.0cmの 透かし孔3方向
12	024-02	土師器 高杯	NS SK310	残高 6.2	ナカメ→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細なワケ 片含む 粗微	不良	内：黄SYR7/8 外：黄SYR7/8	杯部1/2	径1.5cm透かし孔3 方向
13	025-01	土師器 高杯	NS SK310	残高 6.6	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細なワケ片 多し含む 粗微	並	内：黄SYR6/8-赤黄10R5/8 外：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8	杯→脚部 30%完	径1.7cm透かし孔 3方向
14	007-03	土師器 高杯	NS SK310	残高 6.1	ナカメ→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.5mm大砂粒 微細な雲母多 く含 精微	やや甘い	内：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 (黄SYR7/8-赤黄10R5/8)	20%	脚部に径1.3cmの 透かし孔3方向
15	001-02	土師器 高杯 脚部	NS SK310	脚径 10.2 残高 7.8	ナカメ→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	ナカメ・雲 母片含 粗微	良好	内：黄SYR7/8 外：黄SYR7/8	杯部欠損 杯部底完 40%	脚部に径1.3cmの 透かし孔3方向
16	015-02	土師器 高杯	NS SK310	残高 6.3	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細なワケ 片含 精微	やや甘い	内：黄SYR6/8 外：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8	杯部 20%	径1.4→1.6cm透かし 孔2個3方向
17	006-01	土師器 高杯	NS SK310	口径 21.6 残高 7.2	1. びら→ヨコナデ→1. びら→ナカメ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細な雲母多 く含 精微	甘い	内：赤黄10R7/8 外：灰白10YR7/3 赤黄10R7/8-赤黄10R5/8	脚部以上 完	パレス寺
18	009-01	土師器 広口壺	NS SK310	口径 15.0 残高 12.7	オサエ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 2. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 3. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	3mm大砂粒・雲 母多し含 粗微	良好	内：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8-赤黄10R5/8	口縁→杯部 1半 56%	009-02と同一體
19	009-02	土師器 広口壺	NS SK310	底径 7.3 残高 13.5	オサエ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 2. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 3. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	3-5mm大砂粒・ 雲母多し含 粗微	良好	内：黄SYR7/8-赤黄10R5/8 外：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8 (黒N1.5/8の混みあり)	杯部下半 50%	009-01と同一體
19	015-01	土師器 広口壺	NS SK310	口径 14.0 残高 4.1	ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 2. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 3. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細なワケ 片含む やや粗	並	内：黄SYR6/8 外：黄SYR6/8	口縁 20%	
20	013-04	土師器 広口壺	NS SK310	口径 14.7 残高 4.9	オサエ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 2. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 3. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.1mm砂粒 含	並	内：黄SYR6/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8	口縁 20%	
21	013-01	土師器 広口壺	H8 包含箱	口径 13.5 残高 3.9	オサエ→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.1mm砂粒・ 微細なワケ 片多し含 粗微	並	内：黄SYR7/8 外：黄SYR7/8	口縁 30%	
22	005-01	土師器 広口壺	NS SK310	底径 7.0 残高 20.9	ナカメ→ナカメ→ナカメ→ナカメ 2. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 3. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	0.2mm砂粒金 雲母片・ナカ メ多し含 粗微	やや甘い	内：赤黄10R6/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR6/8-赤黄10R5/8 (赤黄10R6/8-赤黄10R5/8)	杯部のみ 70%	杯部外部に黒刺で 染黒
23	007-01	土師器 広口壺	NS SK310	残高 13.5	シロリ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 2. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ 3. ナカメ→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	3mm大砂粒多量 微細な雲母多 く含 粗微	良好	内：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR6/8-赤黄10R5/8	杯部上半 50%のみ	
24	005-02	土師器 粗脚壺	NS SK310	口径 8.4 残高 9.2	ナカメ→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	微細な雲母片 多し含 粗微	良好	内：黄SYR6/8 外：黄SYR6/8 (黄SYR4/4の混みあり)	口縁のみ 完	
25	005-03	土師器 粗脚壺	NS SK310	底径 6.2 残高 2.9	ナカメ→1. びら→ヨコナデ→ヨコナデ 2. びら→ヨコナデ→ヨコナデ→ナカメ 3. びら→ナカメ→ヨコナデ→ナカメ	1mm大砂粒・ 金雲母多し含 精微	良好	内：赤黄10R7/8-赤黄10R5/8 外：黄SYR7/8-赤黄10R5/8	底部のみ 完	

第2表 出土遺物類聚表

No.	発給 No.	種別	出土地位置	計測値 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	施成	色 調	残存度	備 考
26	002-04	土師器 甕	N8 SK310	残存長 6.0	オサエ・ナデ→器縁編織文・水注器状突起 ミガキ→器縁編織文・水注器状突起 ナデ→器縁編織文・水注器状突起	細砂粒含 精微	良好	内: 内ふい黄緑10YR7/2 外: 橙7.5YR7/6	体部破片	
27	025-07	土師器 甕	N8 SK310	残高 3.7	ミガキ→器縁編織文・貝殻刺突	微細なワシモ 片含 精微	良好	内: 橙7.5YR7/6 外: 橙5YR6/8	体部破片	
28	025-09	土師器 甕	N8 SK310	残高 6.3	オサエ・ナデ→器縁編織文 ミガキ後編織文・工具による刺突	微細なワシモ 片含 精微	やや甘い	内: 灰緑5Y7/7-黄緑5.5Y6/1 外: 橙7.5Y7/6-赤灰5YR4/1	体部破片	
29	002-03	土師器 甕	N8 SK310	残存長 4.3	オサエ・ナデ→底状帯編織文 →器縁編織文	細砂粒含 精微	良好	内: 明赤帯5YR5/8 外: 橙5YR6/8	体部破片	
30	025-05	土師器 甕	N8 SK310	残高 4.7	ミガキ→ハケメ後ナデ→貝殻刺突	金ウシモ片 ナリ難含 精微	不良	内: 灰黄2.5Y7/2 外: 橙7.5Y7/6-灰赤帯5YR4/1	体部破片	器底面の磨減がしい
31	025-11	土師器 甕	N8 SK310	残高 7.0	オサエ後ナデ→器縁編織文 →縦方向刺突→器縁編織文 →板状工具木口による刺突	微細なワシモ 片・1mm大砂 粒含 やや粗	良好	内: 内ふい黄7.5YR7/4 外: 橙5YR6/8	体部破片	
32	025-08	土師器 甕	N8 SK310	残高 4.3	オサエ・ナデ→器縁編織文 →縦方向刺突→ミガキ	微細なワシモ 片含	良好	内: 橙2.5YR5/8 外: 橙2.5YR5/6	体部破片	
33	025-06	土師器 甕	N8 SK310	残高 4.9	縦方向ミガキ→横方向ミガキ →貝殻刺突	金ウシモ片 含	良好	内: 橙5YR7/6-橙7.5YR7/5 外: 橙7.5YR7/6	体部破片	
34	025-10	土師器 甕	N8 SK310	残高 4.6	ハケメ→器縁編織文・板状工 具木口による刺突	微細なワシモ 片含 精微	甘い	内: 橙5YR7/6 外: 橙5YR7/8	体部破片	
35	012-03	土師器 甕	N8 SK310	口径 17.4 残高 5.8	オサエ・ナデ→器縁編織文・後 縁状文→ヨコナデ→タテハケ後 縁状文	1mm大砂粒・ 金葉母含 精 微	硬	内: 橙5YR7/6-灰赤帯5YR4/1 外: 橙5YR7/6-橙7.5YR7/6	口縁 20%	
36	014-03	土師器 甕	N8 SK310	口径 16.5 残高 8.7	ヨコハケ→ヨコナデ→ミガキ 後ハケメ	0.2mm砂粒・金 葉母片・タテ リ難多く含	硬	内: 灰白5Y8/2 外: "	口縁 20%	
37	015-03	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 12.0 残高 3.4	オサエ・ナデ→ヨコナデ→刺突 押し引き→ハケメ後器縁編織 文	微細なワシモ 片含 赤褐色心 や粗	並	内: 黄緑5Y6/2-黄緑帯5YR5/2 外: 黄緑5Y7/2-黄緑帯5YR4/1	口縁→体部 30%	
38	015-04	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 12.9 残高 3.4	オサエ・ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→刺突→ハケメ後器縁編 織文	微細なワシモ 片含 粗	並	内: 灰白2.5Y8/2 外: "	口縁 20%	
39	015-05	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 12.8 残高 3.6	オサエ・ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→刺突押し引き→ハケメ後 器縁編織文	微細なワシモ 片含 粗	良好	内: 灰白2.5Y8/2 外: 灰緑5Y7/2-黄緑帯5YR4/1	口縁 20%	
40	003-05	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 12.0 残高 4.0	オサエ・ナデ→ヨコナデ→刺突 →タテハケ→器縁編織文	0.2mm砂粒・金 葉母片多く含	良好	内: 灰黄帯5YR7/2-黄緑帯5YR4/1 外: 黄灰10YR5/1	口縁 25%	
41	013-03	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.6 残高 2.7	ハケメ→ヨコナデ→刺突→器縁 編織文?	金ウシモ片含 粗	硬	内: 灰黄帯5YR7/2-灰緑5Y7/1 外: 灰黄帯10YR6/4	口縁 20%	
42	003-04	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.8 残高 3.1	オサエ・ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→刺突→タテハケ→器縁 編織文	0.2mm砂粒・金 葉母片・タテ リ難多く含	良好	内: 黄緑2.5Y7/3 外: 灰黄帯10YR6/3	口縁 25%	
43	003-06	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 14.0 残高 4.1	オサエ・ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→刺突→タテハケ→器縁 編織文	0.5mm砂粒・ 葉母片・黄色 粒含 精微	良好	内: 灰緑5Y7/2-黄緑帯5YR4/1 外: 灰赤黄緑5YR7/3-灰黄帯 10YR6/2	口縁 25%	
44	015-02	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.8 残高 3.6	オサエ・ナデ→ヨコナデ→刺突 押し引き→タテハケ後器縁編織 文	微細なワシモ 片含 赤褐色心 や粗	硬	内: 灰白2.5Y8/2 外: 灰白10YR8/2	口縁 20%	
45	004-02	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 15.0 残高 2.0	ヨコハケ→ヨコナデ→刺突→ タテハケ	金葉母片含 やや甘い	やや甘い	内: 黄緑2.5Y7/4 外: "	口縁 25%	
46	014-02	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.0 残高 2.5	ハケメ→ヨコナデ→刺突→器 縁編織文	0.1mm砂粒含 やや粗	良好	内: 黄緑2.5Y8/3 外: 黄緑7.5YR5/1-灰黄7. 5YR5/2	口縁 15%	
47	014-01	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 16.5 残高 3.1	ナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→刺 突→ナデ→ハケメ	0.1mm砂粒含 やや粗	並	内: 灰白2.5Y8/2 外: 内ふい黄緑10YR7/2- 灰黄帯10YR6/2	口縁 15%	
48	004-05	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 17.8 残高 4.2	板状工具ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→タテハケ→器縁編織文	0.1mm砂粒・金 葉母片多く含	良好	内: 黄緑5Y7/4-灰緑5Y7/2 外: 内ふい黄緑10YR7/3- 黄緑帯10YR7/1	口縁 30%	
49	004-06	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 18.0 残高 4.4	タテハケ後ヨコハケ→ヨコハケ →ヨコナデ→刺突→タテハケ→ 器縁編織文	微細な黄緑片 多く含	やや甘い	内: 黄緑2.5Y7/3-黄灰灰2. 5Y6/3 外: 黄緑2.5Y7/3	口縁 30%	
50	013-06	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 22.4 残高 3.3	オサエ→ハケメ→ヨコナデ→刺 突押し引き→タテハケ後器縁編 織文	1mm大砂粒・2 mm大葉母含 精微	並	内: 黄灰2.5Y6/1-灰 灰 5Y7/3 外: 灰 3Y4/1-灰白2.5Y7/1	口縁 19%	
51	014-07	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.0 残高 2.8	ハケメ→ヨコナデ→刺突押し 引き→タテハケ→器縁編織文	微細なワシモ 片含 粗	硬	内: 内ふい黄緑10YR6/3 外: "	口縁 20%	
52	015-06	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.0 残高 3.3	オサエ・ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→刺突押し引き→ハケメ後 器縁編織文	微細なワシモ 片含 粗	硬	内: 灰白2.5Y8/2-黄緑5Y7/1 外: 黄緑5Y7/2-黄緑帯5YR4/1	口縁 20%	
53	004-04	土師器 甕 台付甕	N8 SK310	口径 13.0 残高 3.7	オサエ・ナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→刺突→タテハケ→器縁 編織文	0.1mm砂粒・ 葉母片・タテ リ難多く含	並	内: 灰黄帯10YR6/4 外: 内ふい黄7.5YR5/3	口縁 25%	

No.	登録No.	種別	出土位置 遺構	計測値 (cm)	調査・復元の概要	胎土	焼成	色	残存度	備考
54	014-05	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 15.5 底高 1.9	ヨコハケ→ヨコナデ→刺突→ ハケメ	黒褐色粘土 やや粗	並	内: 黄緑S18/2→灰黒S18B/4 外: 黄緑S18B→灰黒S18B/1	口縁 20%	
55	004-03	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 16.0 底高 2.2	ヨコハケ→ヨコナデ→刺突→ タテハケ	金雲母片含 やや粗い	良好	内: 黄緑S18/4 外: 灰黒S21Y7/2	口縁 25%	
56	014-06	土師器 台付甕	NR SD311	口徑 14.4 底高 3.8	オサエ→ヨコナデ→刺突→ ハケメ	黒褐色粘土 やや粗	並	内: 灰F10Y18B/2 外: 〃	口縁 20%	
57	012-02	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 18.0 底高 6.0	ヨコメ→ヨコナデ→ヨコハケ→ヨコ ナデ→タテハケ→櫛掻線文	1.5mm砂粒多 やや粗	不良	内: 黄緑S21Y8/3 外: 黄緑S18/2→灰黒S18Y/1	口縁 20%	
58	010-05	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 7.8 底高 4.7	ナデ→ヨコナデ→オサエ→ナ デ	1~1.5mm砂粒多 粗砂粒含 中粗	やや甘い	内: 1mm砂粒多 外: 灰黒S18/2→黄緑S18/2	口縁は未完 存	
59	010-04	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 8.0 底高 5.2	ハケメ→ナデ→ヨコナデ→オ サエ→ナデ→シヨリ藍	1mm砂粒 1m 大砂粒含 粗	良好	内: 黄緑S18Y/1→灰黒S18Y/1 外: 灰黒S18/3→灰黒S18B/1	口縁 50%	
60	010-03	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 8.0 底高 5.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→オ サエ→ナデ→オサエ	黄緑粘土・金雲 母多含 粗	良好	内: 灰黒S18/4→灰黒S18B/1 外: 灰黒S18/1→灰黒S18B/1	口縁の不完 存	
61	015-07	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 9.8 底高 4.7	ナデ→ヨコナデ→ハケメ	黄緑粘土 粘土含 中粗	並	内: 灰黒S18/3→灰黒S18Y/1 外: 灰黒S18/3→灰黒S18Y/1	口縁 25%	
62	003-01	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 14.8 底高 14.8	ナデ→ハケメ→タテハケ→櫛 掻線文	0.2mm砂粒金 雲母片多く含	良好	内: 2mm砂粒多 外: 灰黒S18/2→灰黒S18B/1	口縁 70%	003-01 口縁と同 一形状
63	003-03	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 16.0 底高 8.4	ナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→ ナデ→タテハケ→櫛掻線文	0.2mm砂粒金 雲母片多く含	良好	内: 灰黒S18/2→灰黒S18B/1 外: 灰黒S18/2→灰黒S18B/1	口縁 25%	004-01 口縁 008-02 口縁
64	004-01	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 18.4 底高 20.9	ナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→刺 突→タテハケ→櫛掻線文	0.2mm砂粒金 雲母片多く含	良好	内: 灰黒S18Y/1→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18/2→灰黒S18Y/2	口縁 20%	003-03 口縁 008-02 口縁
65	008-02	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 12.4 底高 16.0	ナデ→ヨコナデ→ヨコハケ→ナ デ→ヨコナデ→ヨコハケ→ナ デ→ヨコナデ→タテハケ→オサ エ→ナデ	黒褐色粘土・ 金雲母片多く 含 粗	良好	内: 灰黒S18Y/1→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18Y1/2→灰黒S18Y1/2	口縁 50%	004-01・003-03 口縁
66	003-02	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 16.0 底高 6.8	ナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→ 刺突→タテハケ→櫛掻線文	粗砂粒・金雲 母多含 粗	良好	内: 灰黒S18Y/1→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18Y/2→灰黒S18Y/2	口縁 75%	
67	011-01	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 12.6 底高 18.9	口徑 12.6 底高 18.9	0.2mm砂粒多 やや粗	良好	内: 灰黒S18Y1/2→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18Y/2→灰黒S18Y/2	口縁 40%	004-01 口縁 008-02 口縁
68	012-01	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 13.6 底高 22.6	オサエ→ナデ→オサエ→ナデ→ヨコ ハケ→ヨコナデ→タテハケ→櫛 掻線文	1mm砂粒・1m 大砂粒含 粗	良好	内: 灰黒S18Y1/2→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18Y1/2→灰黒S18Y/2	口縁 20%	
69	010-01	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 15.0 底高 10.1	ヨコメ→ヨコハケ→ヨコナデ→刺 突→タテハケ→ナデ→櫛掻線文	0.2mm砂粒金 雲母片多く含	良好	内: 灰黒S18Y1/2→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18Y1/2→灰黒S18Y/2	口縁+底部 40%	
70	010-02	土師器 台付甕	NR SK310	口徑 12.8 底高 13.8	オサエ→ナデ→ヨコハケ→ヨコナ デ→刺突→タテハケ→櫛掻線文	1~1.5mm砂粒多 粗砂粒含 中粗	並	内: 灰黒S18B/2→灰黒S18B/2 外: 灰黒S18B/2→灰黒S18B/2	口縁 20%	
71	005-02	土師器 利味土	NR SK310	口徑 16.8 底高 18.7	ヨコメ→ヨコハケ→ヨコナデ→刺 突→タテハケ→ナデ→櫛掻線文	0.2mm砂粒金 雲母片多く含	やや甘い	内: 灰黒S18Y/2→灰黒S18Y/2 外: 灰黒S18Y/2→灰黒S18Y/2	口縁 20%	
72	019-04	須恵系 灰 Ⅱ	S8 包含層	口徑 9.7 底高 2.3	ヨコナデ→高台貼付時ナ デ	褐色粘土・黄 緑粘土含 粗	良好	内: 灰黒S18Y/1 外: 灰黒S18Y/1	高台 23%	
73	018-02	土師器 羽蓋	S8 SD313	口徑 23.6 底高 4.1	オサエ→ナデ→ナデ→ヨコナ デ→刺突→タテハケ→ハケ メ	0.2mm砂粒 中 粗	並	内: 灰白10YR8/1 外: 〃	口縁+脚 30%	
74	018-03	土師器 編	S8 SD313	口徑 37.2 底高 9.9	オサエ→ナデ→ヨコナデ→ハ ケメ	0.2mm砂粒 中 粗	並	内: 黄緑S21Y8/3 外: 黄緑S18Y/2→灰白10YR8/1	口縁+底部 70%	
75	018-01	土師器 羽蓋	S8 SD313	口徑 37.8 底高 10.4	オサエ→ナデ→ナデ→ヨコナ デ→刺突→タテハケ→ハケ メ	0.4mm大砂粒 やや粗	並	内: 黄緑S18Y1/2 外: 〃	口縁+脚 70%	
76	020-04	土師器 C-包含層	Ⅱ	口徑 2.2			良好	胎土: 黄緑S21Y8/3 脚: 灰白S18Y/2		
77	020-05	土師器 石 Ⅱ	NR SK310	口徑 2.1 底高 1.8			良好	胎土: 黄緑S21Y8/3 脚: 灰白S18Y/2		
78	019-02	須恵系 灰 Ⅱ	D-包含層	口徑 11.9 底高 4.15	ヨコナデ→ヨコナデ	黒色粘土含	良好	内: 灰白N7/0 外: 〃	50%	
79	020-02	須恵系 灰 Ⅱ	E-包含層	口徑 14.4 底高 4.0	ヨコナデ→ヨコナデ	褐色粘土・黄 緑粘土含 粗	良好	内: 灰 N5/0 外: 灰 N6/0	25%	
80	019-03	須恵系 灰 Ⅱ	E地区黄緑	口徑 10.2 底高 5.5	ヨコナデ→ヨコナデ	4mm以下の砂 粒含 中粗	良好	内: 灰 N5/0 外: 〃	30%	子持甕等の子持 片
81	013-05	土師器 編	D地区黄緑	口徑 10.0 底高 4.8	ハケメ→ヨコナデ→ヨコナ デ→ナデ→ヨコナデ	0.1mm砂粒含 中粗	並	内: 黄緑S18Y/2→黄緑S18Y/2 外: 〃	口縁 10%	
82	020-03	須恵系 灰 Ⅱ	D-包含層	口徑 27.3 底高 5.2	ヨコナデ→ヨコナデ	褐色粘土含	良好	内: 青灰S18B/1 外: 灰 N4/0	口縁 15%	
83	019-01	須恵系 灰 Ⅱ	E地区黄緑	口徑 18.8	ヨコナデ→ヨコナデ	褐色粘土・黄 緑粘土含	良好	胎土: 灰F5Y6/1 自然焼: オリーブ黄S18Y/2	50%	



C地区 調査前風景（北から）



C地区 調査区全景（北から）



C地区 SK310土器出土状況（東から）



C地区 SK310土器出土状況（西から）

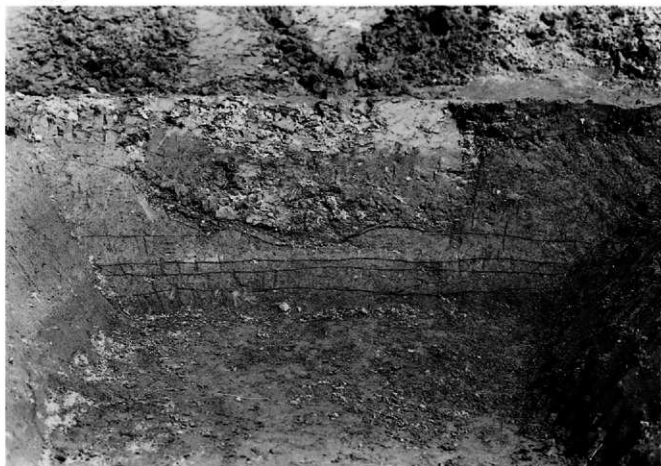


C地区 SD313土層断面 (東から)



D地区 調査区全景 (南から)

PL 4



D地区 調査区北壁土層断面 (南から)



E地区 調査区北半全景 (北から)



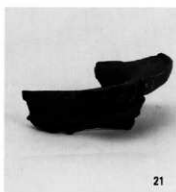
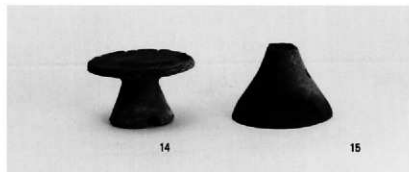
E地区 調査区南半全景（北から）



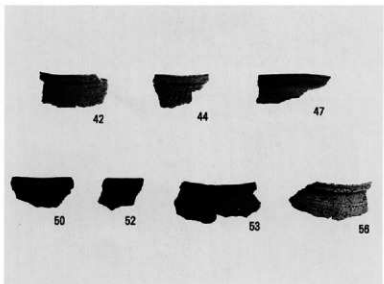
E地区 調査区南壁土層断面（北から）



出土遺物 (1) C地区 SK310 出土土器



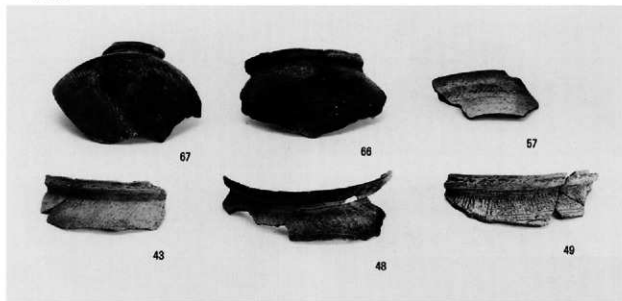
出土遺物(2) C地区SK310 出土土器



出土遺物(3) C地区SK310 出土土器



出土遺物(4) C地区SK310 出土土器



出土遺物 (5) C地区 SK310・SD313, D地区包含層, E地区旧河道出土土器

報告書抄録

ふりがな	てんげじさせこいせきだいにじはくつちょうさほうこく みえけんいちしぐんうれしのちょう							
書名	天花寺北瀬古遺跡(第2次)発掘調査報告 -三重県一志郡地野町-							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	222							
編著者名	大川 操							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 ☎0596-52-1732							
発行年月日	2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんげじさせこいせき 天花寺北瀬古 遺跡	みえけんいちしぐんうれしのちょうてんげ せきだいにじはくつち ょうさほうこく 三重県一志郡地野町天花寺 字北瀬古	24405	93	34° 37' 45"	136° 27' 55"	19981027 } 19981221	705㎡	主要地方 道松阪一 志線道路 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
天花寺北瀬 古遺跡	集落跡	弥生・古墳時代 } 鎌倉・室町時代	溝、土坑	土師器、須恵器				

平成 13(2001) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 11 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告
天花寺北瀬古遺跡（第 2 次）発掘調査報告

— 三重県 志那賀町 —

2001 年 3 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 伊藤印刷株式会社
